

ひまわりからの メッセージ

104号

2020.3.9.

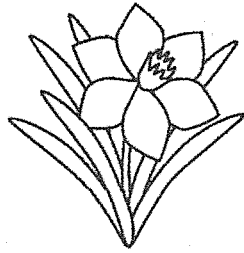
NPO ひまわりの花内

西濃圏域

発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

自然、体で生きること



世は、コロナウィルスのニュースでもちぎりでず。

突然の一斉休校、公的機関の閉鎖、中国や韓国からの入国規制、老人のデイサービス事業への休業要請……と、日常生活の中にしのび寄ってくる目に見えないものとの戦いが続いています。

私は、何故か若い頃のことを思い出していました。

あることがきっかけで、私は電車の吊り革や階段の手すりなどに全く触れることができなくなって、手洗いを繰り返したことがありました。強迫神経症の初期症状であったのかもしれませんが、結婚して長女を出産した時には、今で言う産後うつになって自宅から一步も外に出られなくなりました。それは、肺結核で亡くなった父の死と大きく関係していましたが、そういう心の状態から脱するためには、自分自身の死に対する覚悟のようなものが必要であったと、今、思い返しています。

けれども今も弱い人間である私は、この騒ぎの中で不整脈が頻繁におきるようになってきました。不安やストレスの表われです。そして、いつどうなっても良いという覚悟は、私にはおそろくできないだろうと思っています。

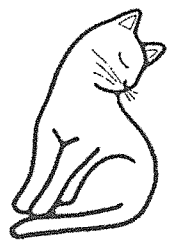
皆さんは、どの様に日常をお過ごしでしょうか。

庭先に出てみると、白梅も紅梅も少し盛りを過ぎ、もくれんの芽は天をさして伸びはじめています。足元には濃い紫のすみれ、水色のイヌノフグリ、ふきの黄緑、そして、はこべは小さな小さな花を咲かせています。そして、それらの草花の中でフリスマスローズがたくましく茎を伸ばしています。いつのまにか白の株と赤紫の株とが交配して、新種の花も増えて、あちこちに種がとんだのか二、三十株にもなっているのです。ウィルスに踊らされている人の世の様とは余りにも異なる木草の静かなたたずまいがそこには在ります。手を伸ばして、すみれの花を摘んでみたら、やさしい香りが指先から立ち上がってきました。

私も自然の中の一つにすぎず、広大な宇宙から見れば、本当にちっぽけな、ちっぽけな一つの生命体ではないのですよね。目に見えないものは恐ろしく、ウィルスへの恐怖は去りませんが、自然体でいこう……庭先に佇んでそんなことを思っています。遠くで鳥のさえずりも聞こえてくる土曜の午後です。

年度末を

迎えて



今年度末は、新型コロナウイルス感染症で、思いもかけないことが次々と起き、見通しの立たない事態が続いています。様々な会議の中止、学校訪問の延期、研修会の中止、引きつぎ、会の中止など、私の身の回りでも予想していなかったことがたくさんありました。……でも、次に進むことを考えていかなければなりませんから、今年度を振り返ってみたいと思います。

相談ケースから見えてきたこと

① 成人期の相談

「僕は悪くない。周りが僕を理解しない。」「娘は私の言うことなど全く聞いてくれません。気に入らないと暴れます。」「仕事はしたいです。でも、勧められる仕事は、僕には合っていない。僕はそんな仕事をする人間じゃないのです。」「等々、本人やご家族から、こういう声が届いてきます。ほとんどが、その方の幼い頃からかかわって来ていない方です。この方たちは、一体どのような幼児期、児童期を過ごして来られたのだろうか」と

思います。

② 中・高校生の相談

私共のセンターに中学生や高校生が直接相談されることは少なく、保護者の方、もしくは学校や教育委員会を通しての相談がほとんどです。

中学生で多いのが、不登校、ゲーム依存、いじめ、異性問題などです。高校生も登校しぶり、不登校、成績の問題などがあります。入学はしたけれど単位が取れず進級できないというケースも見られます。もちろん、暴言・暴行などの問題もありますが、学校では良い子で家庭では暴力をふるっているというケースも多いように思います。

③ 小学生の相談

小学生の相談で圧倒的に多いのは、多動・衝動性に関することです。落ちつきがない、離席する、勝手にしゃべる、友だちとのトラブル、気持ちの切りかえが難しい。一方で不注意タイプの子は、忘れ物や失くし物が多い、ボールとしている、片づけられない、人の話を聞いていない等々。一人でいるのが好きだったり、大人しい子は学校では問題にされないけれど家では暴君というケースもあります。

三年生や五年生は、子どもたちの変化に気づいてあげる時でもありそうです。

④ 幼児期の相談

昔も今も、幼児期の相談といえは、「ことば」に関することは多いけれど、育てにくさもあって、「落ち着きがない」、「ダメと言っても何度と同じことをする」、「目が合わない」という相談もあり、「家で困っていないのに園の先生から言われる」ということもあります。昔に比べて始語が遅くなってきているので、「特別に我が子だけが遅いわけじゃない」と安心されている保護者も見受けられます。

実は、こうして年令ごとに相談を見てみると、私はやはり、幼児期の大切さという点に行きつきます。今のスマホの普及は、お母さんたちに子育ての大変さから、少し時間のゆとりを与えてくれたように思える反面、スマホ依存から生じることばの問題やコミュニケーションの問題は、単に幼児期だけの問題にとどまるのかどうか……心配な問題であると思っております。見ずこまれてしまったその子の困りは、小学校での学習や生活に影響を与え、基礎的な学習が積み上がりません。中学生になり、「入れる高校へ」という選択の結果、中途退学という結果を招くこととなります。

社会性やコミュニケーションの問題も、すでに幼児期から始まっているのです。「うちの子は、好きなことはいつまででも集中してやります」とおっしゃるお母さんに、おそらく不安要素は無いのだからと

思います。実は、好きなことでも、気持ちを切りかえて止めることができないのかどうかが大切なのです。家庭生活の中で、年中や年長になっても切りかえのできないお子さんを前に、親としてどうしていくのか、手がかからなくて良いから、好きなようにさせておくというのであれば、その後、ゲーム依存になっても、家庭内暴力になっても、手をさしのべる手立ては、年令が上がるに従って少なくなっていくと思います。「親としての踏んばりどころ」という機会が、とても大事なのです。

叱られても笑っているお子さんや何度言われても同じことをしてしまってお子さんは、なぜ叱られているのかがわかっていません。だから成人しても「僕は悪くない」という発言になってしまっている。物を投げたり、壊したり、お友達たちも突きとばしたりしても、「ダメ」と言われても、自分がとんでもないことをしてしまっただけだと思っていないことも多いでしょう。おまけに、園や学校で叱られても、「両親や祖父母の誰かが、あなたには悪くない」、「先生や友だちが悪い」と言うのであれば、「そうだ、僕は悪くないんだ、叱る先生が悪いのだ」という判断に至ることになるのは、自明の理と言えるでしょう。

発達障がいの人に否定語はやめましようと言われるのは、「ダメ」なり、「どうすればいいのかが具体的に語られないからです。」「くしたらいいよ。」「くと言ったらいいよ。」と本人の気持ちに共感し寄り添いながら、端的に具体的に

肯定的に言うつもりが、自分の行動を知ることになっていくのだと言えるでしょう。

家庭・家族の役割



「保育士さんに嫌なことを言われて傷ついた」「こんなに小さいのに、色々言われて腹が立つ」と訴えられる保護者の方も多いと思います。そういう方はきっと、園や役所にも抗議をされるのだらうと思います。もちろん、言い方にもよるのでしょうが、保育士さんの方も「信頼関係をなくしたくないので……」と、こぼを濁してしまいうことも多いように思います。

しかし、幼児期の気づきというものは、(これは何度くり返し言っていることですが)決して「障害」の決めつけではないのです。むしろ、どんな風に気を配って子育てをしていくと良いか、子育て支援という立場で話されるべきことなのだと思います。落ち着きがないからと言っておやみに叱るも決してよくなるりません。むしろ二次的な問題を引き起こすことにもなりませぬ。

就学の時、通級指導を勧められたり、支援学級を勧められることもあるかもしれませんが、「うちに関係ありません!」とおっしゃる場合、先生お一人で三十名のクラスをしっかり見ていて下さることが前提です。通常学級で学ぶということ

は、ご家庭もそれなりの覚悟が必要だと思えます。

しかし、大きくなってから相談に来られる方の中には、幼児期にことばが遅かったとか、人との関わりに不安があったという方が意外に多いのです。高学年になっても文字が正しく書けないとか、表現する力が弱いとか、読解力の苦しさなど、おそろくもっと早くに対応してあげていれば、こんな困らずにすんだのだらうにと思ふことも多々あります。

幼児期はもちろん、小学校低学年のうちに気づいて対応することで改善されることもあるはずですよ。

学習のトレーニングがすれば良いわけではありません。お子さんがやる気を出して楽しみながら学んでいくためには、その子、その子に合ったやり方があります。親の見栄や世間体のために子どもたちが困る状況に追い込まれることは避けたいと思ふのです。保護者の方が自分のお子さんの困りにしっかりと向き合って下さること、そのことが全てのスタートであり、将来の自立につながる最も重要な、しかも近道なのだと思います。そして必要な時には、いつでも私達を呼んで下さい。お願いいたします。

次回のセンター親の会は

四月十三日(月)奥の細道記念館です。

